上越教育大学研究紀要　第8巻　第3分冊　平成元年3月
Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 8, Sect. 3, March 1989

青年期の親子における性役割認知のずれ

大　瀧　ミドリ*・近　藤　里　恵**

(昭和63年10月31日受理)

要　　旨

青年と社会の求める性役割認知が大きくへだたっているとき，青年は性役割認知において社会と自己の葛藤を体験する。それ故，青年の人格形成に大きな障害を与える可能性が仮定される。そこで両親を社会規範の代理者とみなし，両親と青年の性役割認知のずれについて検討する。調査対象は177名の高校生とその両親である。質問票は，「子どもに望ましい行動特性」「子どもの行動特性の評価」「男性と女性の役割行動」から構成されており，それぞれの尺度について7段階評定を求める。

結果は，つぎの通りである。

1. 行動特性と役割行動は，それぞれ3因子から構成されている。
2. 両親が青年に望ましいと評定した行動特性の得点は，ほとんど全ての因子において青年が評定したものよりも有意に高い。
3. 男子青年と父親は女子青年と母親よりも伝統的な役割行動に賛成している。
4. 社会と自己の性役割認知における葛藤は，男子の方が経験しやすい状況におかれている。

KEY WORDS

sex role	性役割	desirability	期待	social-role attitude	役割行動
discrepancy	ずれ	adolecence	青年期	high school students	高校生

1. は じ め に

生物学的な性に準拠した心理・社会的役割を獲得して行く過程において，青年が周囲から期待されている性役割を的確に認知することは，重要な発達課題の1つと考えられている。しかしながら，社会的性役割は生物学的な性のように固定的なものではない。かつて，長髪は女性の代名詞でもあったが，現代社会では男性の長髪も1つのファッションとして市民権を得ており，もはや髪の長短は男女を識別する指標ではなくなっている。さらに価値が多様化するとともに女性特に既婚女性の就労率の増加等によって，伝統的に男女に与えられてきた性役割にも変化が生じてきている。たとえば，パーソンズ[1]は男性には道具的役割を，女性には表出的役割を想定しているが，女性も就労やボランティアなど社会との関わりが多くなり，道具的役割をも受け持つようになってきている。これはパーソンズがこのような性役割を指摘した時代の女

*　生活・健康系教育講座
**　生活・健康系教育講座（院生）

性の就労率と現在の女性の就労率の格差を考えれば，前述したように社会的役割が時代や社会の変動により変化することは改めて指摘するまでもないことである。ところで，幼児期や児童期に性役割の同一視やモデル学習等によってとりいれられた性役割を，青年はそのまま自己の性役割観として意味づけるのではなく，自己の確立の過程で青年自身が独自の性役割観を形成し，自らの役割を主体的に選択していくようになる。いわゆる「男らしさ」として男性に期待されている性役割は，社会的望ましさと一致するが，その対極におかれている「女らしさ」は望ましさとは一致しないものとなっている[2]。それ故，男性の場合は，自己が形成する性役割と社会規範としての性のステレオタイプが一致しやすく，性役割の獲得が容易である。一方，伝統的な性役割をよしとしない女性の場合は，自己のアイデンティティそのものの確立が難しくなるために，性役割の獲得において女性の方が男性よりも多くの葛藤を経験することになる。そのため柏木は，女性の方が社会的不適応を多く経験しやすいとしている[3]。しかしながら先にも指摘したように性役割も時代や社会の変動により変化するものであり，柏木の研究[4]から約20年が経過した現代社会の性役割規範もかなり緩やかになってきていることが考えられる。そこで，本研究では，青年期にある高校生とその両親を対象として両者の性役割に関連する行動特性と役割行動の評価のずれの実態を明らかにするとともに，性差によって自己と社会(両親)の性役割期待のずれによる葛藤の差異についても検討する。なお，ここでは子どもの性役割の形成に際して性役割のステレオタイプを子どもの中に媒介するものとして両親を位置付けてとらえる。

2. 方　　法

調査対象：長野県下の公立高等学校の1および3学年の生徒244名とその両親426名である。分析対象は，生徒とその両親の調査票が3部完全にそろっている177組の親子（男子48名，女子129名）である。

調査内容：調査票は子ども票，両親票の2種からなっている。これら2種の調査内容は同一の調査項目で構成されている。内容は①期待する行動特性，②行動特性に関する評定，③性役割行動としての生き方からなり，前2者は36，後者は31の下位項目で構成されている。ただし，両親票では①および②については自分の子どもに期待する行動特性と評定を問う。

調査方法：生徒への調査はクラス担当教師の指導のもとで行う。両親票は生徒の手を介して家庭に持ち帰り，留め置き法で回答を依頼する。後日，生徒を通してクラス担当教師に提出するよう依頼する。

調査時期：1987年9～10月

3. 結果と考察

1. 因子分析

(1) 行動特性

調査項目の設定に際しては，柏木[5]および伊藤[6]の性役割に関する調査項目を参考に男女の行動特性を現す36項目を設定する。評価は「非常に当てはまる」から「非常に当てはまらない」までの7段階評定を求め，それぞれに7点から1点を配す。子父母の評定結果に基づき因子分析した結果，3因子が抽出される。因子に含まれる項目についてみたのが表1である。

第1因子には「指導力のある」「行動力のある」「決断力のある」などが含まれていることから行動性の因子とする。この因子は伝統的な男性役割を示す項目からなっている[7][8]が，現代社会ではこれらの項目は必ずしも男性にだけ必要とされる行動特性とは言えない。

表1　因子別項目と負荷量

行動性		人間性		優美性	
たくましい	0.77	思いやりのある	0.80	細やかな	0.70
行動力のある	0.76	人の気持ちのわかる	0.77	かわいい	0.67
積極的な	0.76	人の立場に立って考えられる	0.75	色気のある	0.66
頼りがいのある	0.75	暖かい	0.70	繊細な	0.64
指導力のある	0.73	明るい	0.64	おしゃれな	0.59
決断力のある	0.71	心の広い	0.61	静かな	0.59
意思の強い	0.66	健康な	0.60	優雅な	0.54
冒険心に富んだ	0.64	誠実な	0.52	よく気のつく	0.53
視野の広い	0.63	よく気のつく	0.51	従順な	0.52
自己主張のできる	0.63	言葉遣いの丁寧な	0.48	献身的な	0.46
大胆な	0.61	視野の広い	0.48	言葉遣いの丁寧な	0.44
自分の生き方のある	0.57	愛敬のある	0.48	愛敬のある	0.41
信念を持った	0.54	信念を持った	0.45		
忍耐強い	0.51	自分の生き方のある	0.42		
頭の良い	0.43	献身的な	0.40		

第二因子には「暖かい」「明るい」「思いやりのある」など他の人への人間的な暖かさを示すものが多く含まれているので人間性の因子とする。これらの項目は男性にも女性にも望ましいものである。

第三因子には「かわいい」「繊細な」「優雅な」などが含まれていることから優美性の因子とする。これは第一因子とは逆に，伝統的な女性役割を示すもの[9][10]が多く含まれているが，人間生活に豊かさ・余裕などを与える行動特性と考えられ，必ずしも女性に付随した行動特性とは考えられない。

これらの3因子はいずれも男性，女性を問わずに望まれる行動特性であるため，因子の名称は上述したように性的にはニュートラルなものが適当と考える。

(2)　性役割行動としての生き方

鹿内ら[11]は家庭・職業・政治・文化・地域社会などの役割領域を代表する31のステートメントを用い，女性の社会的役割に対する態度を評定する尺度を考案している。この尺度は女性の役割をとらえるためのものであるが，女性の役割を男性の役割として反転させることにより，性による違いがどのような形で表出されるかを明らかにしたいと考える。そこで，尺度項目の女性に関する語を全て男性語に反転させ，男性の性役割行動を見るための評定尺度を作成する。しかし，項目の中には女性の生き方としては必ずしも否定されないが，それを男性に適用した場合には，性に関する社会規範からみて奇異な感じをまぬがれないものも多少含まれている。

いずれの尺度についても，「非常に賛成」から「非常に反対」の7段階評定を求め，それぞれに7点から1点を配する。

女性の性役割行動に関する子父母の評定を一緒にして因子分析を行ったところ，3因子が抽出される。鹿内らも3因子を抽出しているが，その中に含まれている項目は本結果とはかなり異なっている。各因子に含まれる項目を表2に示す。

第一因子は，女性の役割をパーソンズ[12]の表出的役割とは異なると考えるとともに女性の生きる場を家庭に限定しない生き方をよしとし，男女を対等平等の関係でとらえられているのが特徴であるため，対等平等の因子とする。

第二因子は，女性が男性より劣るとの前提に立って女性の生き方がとらえられているため，

表2　因子別項目と負荷量

対等平等	I－1．女性が仕事を持てば，夫や子供たちは各人の責任を自覚するようになりかえって家庭に望ましい影響を与える。	0.62
	2．仕事に打ち込んでいる女性は魅力的である。	0.49
	3．自分の能力や可能性を社会のために役立たせることは，女性としての義務の一つである。	0.48
	4．女性は何らかの社会参加をつうじて家庭の外にある世界と積極的なつながりを持つべきである。	0.47
	5．男の子にも女の子にも，平等に家事を手伝わせるべきである。	0.45
	6．男性と対等に議論できるような知識や思考力が女性にも必要である。	0.43
	7．家庭が円満かどうかは主婦だけでなく夫，子供，両親等家族全員が平等に責任を負うべきである。	0.41
不平等	II－1．女性は専門的知識の必要な仕事には適していない。	0.64
	2．女性には家庭を守り子供を育てること以外に，重要な役割は期待されていない。	0.59
	3．家庭のことに真剣に取り組んでいれば，主婦は社会や政治の動きなどまったく気にならないはずである。	0.58
	4．女性は政治などに口出しすべきではない。	0.51
	5．もともと女性は男性に比べ，仕事に必要な能力が劣っている。	0.50
	6．婦人の地位向上などの女性運動に積極的な関心を持つよりも，主婦としての仕事に専念したほうが良い。	0.49
家庭志向	III－1．女性が外で働く場合は，家族に迷惑や不都合をかけない範囲にしておくべきだ。	0.62
	2．家庭がみんなのいこいの場とならなければ主婦としては失格である。	0.56
	3．女性がいかに成功しても女性本来の喜びである愛情や献身の生活が犠牲となるならば，真の幸福を味わうことはできない。	0.52
	4．良い妻，良い母になることが女性にとって人生最大の目的である。	0.48
	5．女性にとって，理屈や教養よりもかわいさや素直さのほうが大切である。	0.45
	6．女性は仕事を持っているからといって，自分の夫に掃除や皿洗いなど，だんじてさせるべきではない。	0.45
	7．婦人の地位向上などの女性運動に積極的な関心を持つよりも，主婦としての仕事に専念したほうが良い。	0.42
	8．女性にとって良き妻，良き母親として生きることよりも一人の人間として生きることの方がもっと大切である。	0.41

不平等の因子とする。

第三因子はまさにパーソンズの表出的役割を担う伝統的な女性の性役割行動をとることをよしとするものであり，家庭志向の因子とする。

ここでは女性の生き方をそのまま男性の生き方にした場合，どのように男女の生き方がとらえられるかについても検討したいと考えたため，男性の生き方に関しては因子分析を行わず，女性の生き方で見出された因子に基づいて男性の性役割行動としての生き方について分析す

る。

ただし，対等平等の因子は単に道具的役割に限定せず女性と対等平等な関係で生きる男性の生き方を示している。このように男性語に反転させた対等平等の因子は，男性の生き方として特に否定される意味内容にはなっていない。不平等の因子は男性は女性より劣るものとしてとらえられているため，男性の性役割に関する社会規範と相反するものとなっている。家庭志向の因子は伝統的な女性の生き方を男性の生き方に反転させたため，たとえばIII-1は女性の生き方として述べられているときは，「家事も仕事も」両立させるような生き方を指す。一方，男性の場合には，家族との生活が十分に確保されるように労働時間が過重にならないようにコントロールする生き方になる。このように意味内容が男性と女性では異なってしまうものもある。また，III-5のように社会的ステレオタイプの男性の生き方からすると奇異な印象をあたえるものも含まれているが，生き方の方向としては家庭志向を意味することになる。

いずれにしても，この尺度でとらえられる男性の生き方は伝統的な男性役割とはなかりずれたものとなっている。

2.　行動特性に関する評定

まずはじめに，青年自身が自らの行動特性をどのように評定し，また彼等の両親が彼等の行動特性をどのように評定しているかについてみる。表3は行動特性の平均値についてみたものである。

男子も女子も人間性＞行動性＞優美性の順で自己の行動特性と合致すると評定しており，い

表3　子・父・母の評価の平均値と標準偏差

	因子	子ども		父親		母親		有意差	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	子父	子母
男子 (N＝48)	行動性	4.19	0.86	4.49	0.60	4.51	0.84	○	○
	人間性	4.58	0.82	4.82	0.62	5.04	0.75		＊＊
	優美性	3.80	0.80	4.35	0.61	4.50	0.75	＊＊	＊＊
女子 (N＝129)	行動性	4.05	0.90	4.64	0.86	4.60	0.84	＊＊	＊＊
	人間性	4.48	0.82	4.90	0.77	4.93	0.65	＊＊	＊＊
	優美性	3.64	0.85	4.53	0.76	4.44	0.98	＊＊	＊＊

○ $p<0.1$　＊ $p<0.05$　＊＊ $p<0.01$

ずれの因子においても有意な男女差は認められない。また，父母が我が子について行った行動評定をみると人間性＞行動性＝優美性となっており，子の性による差は有意ではない。つまり，現実の行動特性を評定した場合は，子の評価においても両親の評価においても性による差は有意ではない。しかし，親子の評定を比較した場合には子と父，子と母の間には有意差があり，ほとんどの行動特性に親の方が子よりも有意に高い評定を与えている。このことから行動評定においては，子は親との間で葛藤を経験していないと考えられる。

ところで，子が体験する葛藤は現実の行動特性の評定のずれよりも，むしろ望ましいとされる行動特性における親子のずれによることが考えられる。そこでつぎに，青年自身が望ましいと考える行動特性と親が我が子に期待する行動特性の関係についてみる。

3. 男女に期待する行動特性

(1) 子・父・母の期待

高校生とその父母のそれぞれが男子および女子に望ましいとする行動特性の平均値を因子別に示したのが表4である。

表4 子・父・母の期待の平均値と標準偏差

	因子	子ども		父親		母親		有意差	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	子父	子母
男子 (N=48)	行動性	5.83	0.91	5.95	0.81	5.87	0.98		
	人間性	5.87	0.81	5.95	0.82	5.92	0.88		
	優美性	4.55	0.65	4.91	0.80	4.81	0.87	*	○
女子 (N=129)	行動性	5.27	0.74	5.45	0.72	5.61	0.69	*	**
	人間性	6.19	0.59	5.96	0.65	6.10	0.70	**	
	優美性	5.30	0.82	5.38	0.71	5.42	0.70		

○ $p<0.1$ * $p<0.05$ ** $p<0.01$

高校生：男女別に3因子の平均点を比較した場合には，優美性よりも人間性と行動性を男子に必要な行動特性としている。一方，女子は人間性を他の因子よりも有意に期待する行動特性と考えており，優美性と行動性にほぼ等しい評価を与え，両者に有意差はない。つぎに，各因子における男女差をみると，行動性は男子の方が女子よりも有意に高く評価し，人間性と優美性の2因子は女子の方が男子より有意に高く評価している。これらの結果は男女のいずれも，行動性を男性の行動特性ととらえ，優美性を女性の行動特性ととらえていることを示し，行動性と優美性は男女を識別する行動特性となっている。

父親：男子を持つ父親も男子と同様に期待する行動特性として人間性と行動性を優美性よりも有意に高く評価している。一方，女子を持つ父親は女子と同様に期待する行動特性として人間性を最も高く評価し，行動性と優美性には有意差はなく2因子に等しい評価を与えている。また，3因子それぞれについて男子を持つ父親と女子を持つ父親の評定を比較すると，人間性については男子を持つ父親も女子を持つ父親も等しく期待する行動特性としているが，行動性に関しては男子を持つ父親の方が明らかに男子に期待する行動特性としている。また，優美性は女子を持つ父親の方が女子に期待する行動特性と考えている。このように男子を持つ父親と女子を持つ父親の考え方は明らかに異なっており，やはり父親も行動性と優美性の2つが男女を識別する行動特性ととらえている。

母親：男子を持つ母親も男子や男子を持つ父親と同様，優美性を人間性と行動性よりも低く見る傾向が明確に認められる。一方，女子を持つ母親は女子に対して人間性を最も望ましい行動特性とし，ついで行動性を重視し，優美性を最も軽視しており，3因子の関連は女子や女子を持つ父親とは異なっている。また，3因子それぞれについて男子を持つ母親と女子を持つ母親の得点を比較すると，行動性と人間性については男女いずれを持つ母親も等しく期待する行動特性としているが，優美性については女子を持つ母親の方が男子を持つ母親よりも期待する行動特性と考えている。つまり，行動性は男女の差なく望ましい行動特性と考えられているが，優美性は明らかに女子の行動特性としてとらえられている。母親は子や父親のように優美性と行

動性を男女を識別する行動特性とはせず，優美性を重んじるか否かが男女を識別するものと考えている。

(2)　期待する行動特性における親子のずれ

ところで，子自身がそれぞれの行動特性を身につけたいと期待する程度と父母が子に獲得して欲しいと期待する行動特性のずれが大き過ぎる時に，子は行動特性の獲得において葛藤を経験すると考えられる。そこで，まず，子と父親の期待のずれについてみる。行動性および人間性では男子と男子を持つ父親の間には有意差は認められないが，優美性は男子を持つ父親の方が男子よりも期待する行動特性として有意に高い評価を与えている。一方，女子と女子を持つ父親についてみると，行動性には女子を持つ父親の方が期待するとして女子よりも高い評価を与えている。また，人間性については女子の方が女子を持つ父親よりも必要な行動特性として有意に高い評価を与えている。優美性については両者の間に有意な差は認められない。つまり，父親は男子には男子が考える以上の優美性を期待し，女子には女子が考える以上の行動性を期待しており，父親が子に期待する行動特性はいわゆる社会通念としての性役割のステレオタイプを子に期待するというよりも，むしろ社会通念に反したものとなっている。これは先に見たように父親が男女に望む行動特性そのものは性役割のステレオタイプに一致しているにもかかわらず，子と父親の間の期待のずれとしてみた時には，両者のずれが生み出すであろう抑圧は父親の意図に反してステレオタイプ化された性に基づく行動特性を解消する方向に働くことが示唆される。葛藤という視点からみた場合には，男子が自分の行動特性として望まない優美性を父親から期待されることになり，女子よりも男子の方が父親との間に多くの葛藤を経験しやすいと考えられる。

つぎに子と母親についてみると，男子と男子を持つ母親の場合には行動性と人間性には有意差は見られないが，優美性については母親の方が男子よりも高い評価を与える傾向にある。一方，女子と女子を持つ母親についてみると，母親は行動性を女子よりも女子の行動特性として高い評価を与えている。人間性と優美性には両者の間に有意差は認められない。このように子と母親の場合にも，母親は男子には優美性を，女子には行動性を期待しており，子と父親の期待のずれの場合と同様に両者のずれの方向もステレオタイプ化された性に基づく行動特性を解消する方向に働くものと考えられる。

男子を持つ父母と女子を持つ父母のそれぞれについて期待のずれをみる。男子を持つ父母の間では，3因子全てにおいて有意差は認められない。しかし，女子を持つ父母では行動性と優美性に有意差はないが，人間性は母親の方が父親よりも女子に期待する傾向がある。しかし，この父母間のずれも基本的には子どもの期待と方向が同じであり，葛藤を生む状況にはないものと思われる。

以上，青年期の若者とその両親が男女の行動特性である行動性・人間性・優美性に対してどのように期待しているかについてみた。その結果，子・父・母を問わず，最も期待する行動特性として人間性を考えていることが明らかとなる。これは，男女や年齢を問わず人間性が最も望ましい特性と評価されると言う伊藤[13]の結果と一致するものである。また，柏木[14]の指摘するように，男子は行動性の方を優美性よりも重視する傾向があり，男子の方に伝統的な性による分化が認められる。しかし，女子は行動性よりも優美性を重視すると言うことはなく，性による分化は明確に認められない。また，男子・父・母が男子に期待する行動特性の順位に注目すると行動性＝人間性＞優美性となっており，性役割のステレオタイプと同じになっている。し

かし，女子の場合は女子と父は人間性＞行動性＝優美性であるのに対して，母では人間性＞行動性＞優美性となり，いずれの順位も性役割のステレオタイプとは一致しない。柏木[15]は女子は女子が考える以上に女性的特性を身に付けるように社会から期待され，その結果女性の方が自己と社会との葛藤を経験しやすいとしているが，そのような傾向は認められない。社会規範の仲介者である父母から男子は男子が低く評価している優美性を，女子は女子が高く評価している行動性を望まれており，むしろ男子の方が社会的葛藤を経験しやすい状況におかれている。また，伊藤[16]は男子は社会が期待するほど masculinity を重視することはなく，また女子は社会が期待する以上に masculinity を重視するとしている。伊藤の言う masculinity は内容的には本研究の行動性とほぼ同じものである。行動性に関しては男子とその父母の間には有意なずれはないが，女子の場合には，女子が考える以上に父母の方が行動性を重視しており，伊藤の指摘するような関連は認められない。このような柏木や伊藤の結果と相違した理由の１つはマネー[17]の指摘を待つまでもなく，性役割に関する社会規範の内容そのものが，時代や社会の影響を受けたことが考えられる。特に，最近の性役割におけるユニ・セクシャル化が指摘されよう。

(3) 下位各項目における親子のずれ

日常生活での実際的な関わりは，上にみたようなひとまとまりとしての行動特性ではなく，むしろ１つ１つの項目で扱われている行動への期待のずれが意味を持つと考えられる。そこで，つぎに下位項目における親子のずれをみる。親子の間に有意差のあった項目の数を示したのが表５である。

男子の場合は有意差のある項目が少なく，父親との間に有意差が認められた項目は「忍耐強い」「繊細」の２項目である。また母親とは「暖かい」「おしゃれ」「優雅」「愛嬌」「思いやり」「意志の強い」「人の気持ちが分かる」「従順」「冒険心に富んだ」の９項目の間に有意差が認められる。ただし，「冒険心に富んだ」は男子の方が有意に高い得点となっている。父母の両方と有意差のある項目は「献身的」「誠実」「可愛い」「頭の良い」「色気の有る」「頼りがいのある」「細やか」の７項目である。いずれも子どもより親の方が有意に高く評価している。

表５ 親子間に有意差のあった項目数

因子	男子		女子	
	子―父	子―母	子―父	子―母
行動性(N＝15)	3	4	13	11
人間性(N＝15)	2	6	12	11
優美性(N＝13)	4	8	12	12

女子の場合はほとんどすべての項目に亘って有意なずれが認められる。そこで，子と父母の間に有意差が見出だされない項目をみると「明るい」「健康」「冒険心に富んだ」であり，父親との間に有意差がない項目は「人の立場になって考えられる」のみであり，母親との間に有意差のない項目は「自分の生き方がある」「信念をもった」である。このように下位項目においても男子は優美性を期待されている。一方，女子の場合は３因子全てに亘って多くの期待をかけられており，伝統的な女性の生き方を特に期待されていない。

つぎに下位項目毎に父親と男子の得点差と父親と女子の得点差を比較し，両者のずれの大きさの有意性についてみる。母と子についても同様に検討する。

男子と父親のずれの方が女子と父親のずれより大きいものは「言葉遣いの丁寧な」「愛嬌のある」「かわいい」「おしゃれな」の４項目である。女子と父親とのずれの方が大きいのは「指導力のある」「頼りがいのある」「心の広い」の３項目である。一方，男子と母親の方のずれが大

きいのは「献身的な」「かわいい」「繊細な」「おしゃれな」であり，女子と母親のずれの方が大きいのは「忍耐強い」「たくましい」「指導力のある」「頼りがいのある」「行動力のある」「自己主張のできる」「積極的な」「自分の生き方のある」である。これらの下位項目では全ての親の方の得点が高くなっている。男子は生活の潤い的な特性におけるずれが女子よりも大きく，男子が思う以上に期待されていることを示している。一方，女子は自己主張など自立に関した特性におけるずれが男子よりも大きい。このように下位項目における親子のずれからも，先に指摘したように親子間のずれは，結果的には伝統とされてきた男らしさ女らしさをより不鮮明にする方向に向かっていることが示唆される。

4．性役割行動としての生き方

表6および7は女性と男性の生き方の各因子の平均値についてみたものである。

(1) 子・父・母の考え方

表6　各因子の平均値と標準偏差(女性の生き方)

因　子	男子(N=48)		女子(N=129)		父親(N=177)		母親(N=177)	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
対等平等	4.74	0.64	5.44	0.74	5.12	0.62	5.46	0.69
不平等	3.24	0.73	2.55	0.89	3.24	0.90	2.74	0.94
家庭志向	4.71	0.59	4.38	0.82	4.69	0.68	4.41	0.78

表7　各因子の平均値と標準偏差(男性の生き方)

因　子	男子(N=48)		女子(N=129)		男子(N=177)		女子(N=177)	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
対等平等	5.41	0.80	5.72	0.72	5.61	0.67	5.82	0.63
不平等	2.69	0.94	2.33	0.72	2.44	0.90	2.29	0.89
家庭志向	3.96	0.83	3.85	0.62	3.70	0.75	3.65	0.66

男子：女性の生き方として対等平等と家庭志向の生き方には同じ程度に賛成しているが，不平等な（女性蔑視）生き方に賛成するものは有意に少ない。男子は女性を男性よりも劣ったものとして見るよりも，むしろ男性と同等な能力や可能性を持ったものとして受け止めている。しかし，他方女性に伝統的な性役割を期待するものも多い。男性の生き方についてみると対等平等の生き方は有意に高く評価するが，家庭志向の生き方にはどちらとも言えないと態度を保留しており，不平等な（男性蔑視）生き方については明らかに反対している。各因子について男女の生き方を比較すると，対等平等は男性に，不平等と家庭志向は女性の生き方として有意に高い評価を与えている。このように男女の生き方に置かれる価値が男子の中では明白に異なっている。

女子：女性の生き方としては対等平等＞家庭志向＞不平等（女性蔑視）と有意差がある。賛成の度合いをみると，最も受け入れられているのは対等平等の生き方であり，家庭志向についてはどちらとも言えないと態度を保留している。また，不平等（女性蔑視）な生き方については，明らかに反対している。男性の生き方についても女性の生き方と同じ傾向が認められる。

つぎに男女の生き方を比較すると，対等平等の生き方はより男性の生き方とされており，家庭志向の生き方はより女性の生き方とされている。また，不平等な生き方は女性の生き方とされ，男性の生き方としては否定されている。女子においても男女の生き方に置かれる価値が明白に異なっている。

父親：女性の生き方についてみると対等平等な生き方と家庭志向の生き方はいずれも賛成を得ているが，その度合いは対等平等の生き方の方が有意に高い評価を得ている。男性の生き方をみると，対等平等の生き方は賛成を得ているが，家庭志向の生き方については態度が保留されている。また，不平等（男性蔑視）を前提にした生き方は明白に拒否されている。男女の生き方を比較すると，男性には対等平等な生き方を，女性には家庭志向の生き方をよしとする傾向が顕著に認められる。

母親：女性の生き方についてみると，各因子の評価は対等平等＞家庭志向＞不平等（女性蔑視）とに有意差が認められる。評価を意味的に見た場合には，対等平等の生き方が最も多くの賛成を得ているが，家庭志向の生き方については賛否を保留し，不平等（女性蔑視）を前提とした生き方は否定している。男性の生き方を見ると，対等平等の生き方は賛成されるが，家庭志向や不平等を前提とする生き方は明らかに低い評価が与えられ，拒否されている。男女の生き方を比較すると，対等平等の生き方は女性より男性の生き方として高い評価が与えられている。一方，家庭志向と不平等な生き方は女性の方に男性よりも高い評価が与えられている。

以上，それぞれについて男女の生き方を見た結果，子・父・母のいずれにおいても男性および女性の生き方として対等平等の生き方が多くの賛成を得ている。しかし，男女の生き方を比較した場合には対等平等の生き方は男性の生き方として高い評価を受けている。家庭志向の生き方は女子の生き方として賛成する傾向が認められるものの，男性の生き方としては保留するものが多い。これら2つの生き方は男女の生き方を識別するものになっている。

(2) 性役割行動における親子のずれ

男子と父母：まず，父親とのずれについてみる。女性の生き方について対等平等の生き方には有意差が認められ，父親の方がより高い評価を与えている。他の2因子については有意差は認められない。男性の生き方についてみると，男子の方が男性の生き方として家庭志向に有意に高い評価を与えているが，得点の意味をみると必ずしも積極的に男性の生き方として家庭志向の生き方を肯定しているわけではない。対等平等と不平等のいずれにも父親は男子よりも高い評価を与える傾向がうかがえる。しかし，評価のずれの方向はいずれの因子でも同じものとなっている。

女性の生き方における母親とのずれをみると，3因子いずれにも有意差が認められる。対等平等の生き方は母親の方が女性の生き方として高い評価を与えている。一方，他の2因子については男子の方が高い評価を与えている。考え方のずれを意味的に見ると対等平等にはいずれも賛成し，不平等にはいずれも反対し，賛成反対の方向はそれぞれ同じになっている。しかし，家庭志向のずれの方向は異なっている。また，男性の生き方についてみると，女性の生き方と同様にいずれの因子においても有意差が認められる。ただし，家庭志向については女性の生き方に認められたようなずれの方向における差異は認められない。女性の生き方については母親の方が進歩的であるのに対して男子の方が保守的である。

女子と父母：まず，父親とのずれについてみる。女性の生き方の3因子に有意差が認められる。対等平等の生き方は女子の方が高い評価を与えており，他の2因子には父親の方が高い評

価を与えている。各因子における両者のずれの方向をみると，対等平等と不平等の因子では両者間のずれはそれぞれ同じ方向になっているが，家庭志向のずれの方向は異なっている。男性の生き方についてみると，3因子において両者に有意差は認められない。ただし，女子の方が男性の生き方として父親よりも家庭志向をよしとする傾向は認められる。女性の生き方について父親は保守的であるのに対して女子の方が進歩的である。

母とのずれについてみる，女性の生き方についてはいずれの因子にも有意差は認められないが，不平等については女子の方が低く評価する傾向が認められる。男性の生き方については家庭志向についてのみ有意差が認められ，女子の方が男性に家庭志向の生き方を望んでいる。

男子は男性の生き方において父親と母親との間に有意なずれを生じている。また女子の場合は父親との間に女性の生き方について有意なずれを生じているが，母親との間には有意なずれはない。男女とも異性の親との間に有意なずれを生じている。しかし，男子と女子ではその方向は逆になっており，父母との葛藤の大きさについては明確な差異は認められない。

(3)　下位項目における親子のずれ

つぎに，各因子の下位項目における子どもと親のずれについてみる。表8と9は女性と男性の生き方における親子のずれに有意差のあった項目数を示したものである。

女性の生き方については，下位項目においても男子は母親との間に有意なずれを生じている

表8　親子間に有意差のあった項目数(女性の生き方)

因　子	男子				女子			
	子>父	父>子	子>母	母>子	子>父	父>子	子>母	母>子
対等平等	0	2	0	4	3	0	0	1
不平等	0	0	0	2	6	0	1	0
家庭志向	0	0	1	1	4	0	3	0

表9　親子間に有意差のあった項目数(男性の生き方)

因　子	男子				女子			
	子>父	父>子	子>母	母>子	子>父	父>子	子>母	母>子
対等平等	0	1	0	2	1	0	0	1
不平等	0	1	0	0	2	0	0	0
家庭志向	0	1	1	2	2	1	0	2

項目は多く，女子の場合は父親との間に有意なずれを生じている項目が多い。男子を持つ母親は男子よりも女性が家庭や社会や職業など広い分野において男性と対等平等に生きることを必要と考えている。また，女子の場合は社会や職業における女性の能力を蔑視する傾向が父親よりも多いとともに，父母に比べて仕事や社会との関わりを家庭を中心に考えている。男性の生き方についてみると，女性の生き方ほど親子間に有意なずれはない。特に，女子の場合にはその数は半減している。男子の場合は有意なずれを生じている項目は親の方が高い得点を示し，因子による偏りはない。また女子の場合は父親とのずれは女子の方が高い得点を示すことによって生じている。母親とのずれは逆に母親の方が高い得点を示すことによって生じている。行動特性でみたと同じ方法で子と父母のずれを比較した場合には，女性の生き方については男子と父親ではIII-5(表2参照以下同様)が大きく，女子と父親ではII-6とIII-7のずれが大きく，いずれも父親の方がこのような女性の生き方をよしとしている。また，母親の場合は男子の方

のずれが女子と母親のずれよりも有意に大きく，I-2, I-5, I-6のような女性の生き方をよしとする母親が男子よりも多い。母親は女性の生き方として職業・知性・家事などについて進歩的に考えているのに対して男子は明らかに伝統的な女性の生き方をよしとしている。男性の生き方については男子と父親のずれの方が女子と父親のずれよりも有意に大きく，I-2, II-1, III-1, III-4をよしとしている。つまり，父親は伝統的な男性の生き方を肯定しながらも家庭生活に中心を置く男性の生き方も肯定しており，父親の方が男性の生き方を男子よりも多彩にとらえている。女子と父親の方がずれが大きいのはIII-6のみである。また，子と母親ではすべて男子と母親の方が大きく，I-2, I-4, II-1, II-2, III-5, III-8と従来の男性の生き方に新しい生き方をプラスしてとらえており，母親も男子よりは男性の生き方に多様性を認めている。

先に因子についてみた時には，男女が経験するであろう葛藤の強度の差異は不明瞭であった。しかし，下位項目におけるずれが，男性の生き方において女子と父母の間よりも男子と父母の間に多く生じていると言うことは，男子の方が女子よりも多くの葛藤を経験しやすいことを示唆するものと考えられる。

4. おわりに

アメリカ社会における性役割に関するステレオタイプの基盤がゆるんだ原因として，マネーは[18]第2次大戦における青年期の男女の体験を指摘している。つまり，男子青年の多くのものは徴兵経験を通して，それまで伝統的な女性の役割とされていた料理，掃除，洗濯を体験した結果，これらの仕事が必ずしも男性に不向きではないことを認めることになった。一方，女子青年の場合は，銃後の守りとして生産労働に参加することによって生産労働が女性を非女性化しないことを体験した。しかし，彼によるとこれらの若者は戦争体験によって伝統的な性役割を揺れ動かすことに大きな役割を果たしたものの，彼等がすでに子ども時代に形成していた男らしさ女らしさの概念を再構築するまでには至らなかったと言う。しかし，彼等は男や女であるとはどういうことかに関してかなり柔軟な考えを持つことができていたために，彼等の子どもたちは，両親に比べて伝統的な性役割にとらわれないようになったとして，個人と社会の性役割観が進歩的な交互作用を持つことを示唆している。このような指摘は日本の社会にも当てはまるように思われる。本調査の親の平均年齢は40台半ばであり，彼等の親達は青年期に紛れもなくマネーの指摘する内容の戦争体験をもつ人々である。これらの人々から2世代経た今の高校生とその親達が伝統的な性役割からかなり自由になっていることは頷けることである。特に，本結果では女性の性役割の自由度が大きく，柏木[19]や伊藤[20]が指摘するような性役割獲得における葛藤を女子青年の方が男子青年よりも強く体験するような状況にはない。性役割の認知では，青年自身が望ましいと考える性役割と社会が青年に期待していると青年自身が考える性役割のずれが問題とされやすい。しかし，本研究では青年が自分自身に望ましいとする性役割と彼等の両親が彼等に獲得して欲しいと望んでいる性役割とのずれを問題としている。この前提には親が子どもに関わるときには，単にしつけ者として親個人の考え方だけに基づいて関わるのではなく，その背景にはその社会が持っている性役割期待が大きな力をもっており，そのため親が意識しようがしまいが，結果として親が属している社会の性に関する規範を望ましいものとして子どもに伝える役割を果たすことになるという仮定がある。つまり，社会規範は親の

子への期待として具体的な生活レベルを通して子どもに伝えられるため，日常的な葛藤を親子のずれを通して体験しやすいものと考える。柏木[21]や伊藤[22]が指摘するように，青年が自分自身の性役割観を形成するにあたって影響力をもつのは客観的に存在している社会の性役割でなく，当の青年が社会から性役割をどのように期待されていると受け止めているかが何よりも意味を持つとの考え方もあろう。どちらの方がより強い葛藤を青年に与えるかについては，改めて検討される必要がある。

調査にご協力戴いた長野県立西高等学校及び東高等学校の1・3年生の皆さんとそのご両親，そして調査の機会を与えて下さいました校長先生とクラス担任の諸先生に衷心より感謝申し上げます。
なお，資料の集計にはJEPSを使用した。

引用文献

1) T. パーソンズ & R. F. ベールズ　橋爪貞雄他訳「家族」黎明書房　1981
2) 伊藤裕子　秋津慶子　青年期における性役割観および性役割期待の認知　教育心理学研究　**31**, 2, 45-50, 1983
3) 柏木恵子　青年期における性役割の認知 III　教育心理学研究　**22**, 4, 1-11, 1974
4) 柏木恵子　青年期における性役割の認知　教育心理学研究　**15**, 4, 1-10, 1967
5) 柏木恵子　青年期における性役割の認知 II　教育心理学研究　**20**, 1, 38-59, 1972
6) 伊藤裕子　性役割の評価に関する研究　教育心理学研究　**26**, 1, 1-11, 1978
7) 前掲書　5)
8) 前掲書　6)
9) 前掲書　5)
10) 前掲書　6)
11) 鹿内啓子他　女子大生の社会的・職業的役割意識の形成過程に関する研究　名古屋大学教育学部紀要　**29**, 101-135, 1982
12) 前掲書　1)
13) 前掲書　2)
14), 15) 前掲書　3)
16) 前掲書　2)
17), 18) J. マネー & P. タッカー　朝山新一訳　「性の署名」　人文書院　1979
19) 前掲書　3)
20) 前掲書　2)
21) 前掲書　3)
22) 前掲書　2)

The Discrepancy between the Adolescents' and Their Parents' Cognition of Sex-Roles

Midori OTAKI and Rie KONDOU

ABSTRACT

When there is too big of a discrepancy between the adolescents' and their parents' cognition of sex-roles, the adolescents experience many complications about self-desirability and social desirability. It is assumed that they probably became emotinally immature due to the resulting complications. Assuming that the parents were representatives of those who set the social standards, we investigated the discrepancy between the adolescents' and their parents' cognition of sex-roles. The subjects consisted of 177 high school students (48 males and 129 females) and 354 parents.

The questionaires contained the following 3 scales : 1) evaluation including 36 sex-role characteristics for males and females, 2) disirability including the same of 1), 3) social-role attitude including 31 statements regarding male and female in the society. The subjects rated each one by using a 7-point scale.

The results were summaraized as follows :

1. Three factors in three scales were identified.
2. The desirability of sex-role characteristics for adolescents set by the parents was higher than that set by the adolescents themselves for all factors.
3. Male adolescents and fathers had more of a classical social-role attitude than female adolescents and mothers.
4. The results supported that the male adolescents had more complications regarding self-desirability and social desirability than the females.